
竜の世界にとりっぷ！ 3

御紋

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の世界にとつづく！ 3

【Zコード】

Z0171P

【作者名】

御紋

【あらすじ】

「竜の世界にとつづく！」第三弾。思いもかけずにお仕事に支障が生じた模様です。「老体の意地悪と書いて若者の苦労と解きたい今日この頃です。 * シリーズ化しております。

(前書き)

いぢらは、「動物の世界にとりっぷー」、作品たちと同じ世界観のもとで、書かれています。詳しくは、まとめサイトさま（<http://www22.atwiki.jp/animaltrip/pages/1.html>）へどうぞ。

* 蛇の描写について嫌悪を抱かれる方は見ないほうがよいかもしれません。

以上に了解された方から、スクロールどうぞ！

挾啓 愛すべき我がクソジジイの

お久しぶりですお祖父さま。そろそろ最初の一文をいじつてみるべきかと考えた私です。「愛すべき」は「我が」にかかるのか「クソジジイ」にかかるのかに迷つてはいらつしやらないでしょうか？大丈夫です、愛は常に我が家とにあります。もちろん貴方にもありますとも。 博愛主義という名の女たらしの貴方ですもの滅べばいいのに女の敵。

……失礼、つい手元がすべりましたわ気にならないでください。うつかりこの世界に落ちてきた私ですが、幸いにも保護してくださいたご主人様のおかげで何事もなくすこせています。ご主人様は竜族の守銭奴と呼ばれるリアディです。

……素で間違えました。逆でした。

竜族のリアディというお名前のことと守銭奴っぽい性格をした我がご主人様は、今日もお元気です。

我々の行っているお仕事が順調なのはよいのですが、一番煎じの営業者があらわれたらしいとかで怒り狂つておりました。私にしてはそれだけ世間に認識されたと喜んでおいたらどうですかとしか言えないのですが。

一番煎じのお店は早々に開店休業したそうです。なにやら、一人目のお客様に怒り狂つて店舗を破壊されたとのこと。

竜の逆鱗にでも触れたのでしょうか。迂闊なことをしたものですね。この世界の上位種たる方々を相手に商売したかつたら、竜の禁

忌の一つや二つ理解した上で行いなさいというのです。

まあ、かく言う私も詳しいわけではないのですが。

体力も神経も使うこの仕事ですが、楽しい仕事仲間もあり、可愛い癒しもあり、私としてはまずまずの仕事環境だらうと考えてあります。

これもひとえにお祖父さまに受けた22年間の鍛練という名の趣味に耐えたおかげと思うと、自分は涙ぐみそうです。幼い5歳のころからよくぞ生きてこれたなあ自分。むしろ、ぐれなかつたことが奇跡か。

もちろん貴方が子供嫌いなわけなく、父母を亡くしたりだつた私への愛だつたという説はよおおおくお祖母さまより訊いてはおりましたけども。

……貴方の愛はちょっと間違えてると思うのは私だけなのでしょうか、是非この答えだけは世界の壁を越えた今でも確認したい疑問事項です。

今日のお仕事は以前も訪れてくださったチエイサ様です。チエイサ様の赤い鱗は若干の乾燥傾向がみられるため、仕上げのワックスには薬草を混ぜた特別性のものを今回はじつ用意しました。お気に召していただけるとよいのですが。

今日も異世界の空はいい天氣です。汗水たらして働くにはよい日でしょう。

貴方も元気に働いてください。年はとるけれども、働く喜びは味わうべきです。決して、無理をしるということではありませんよ。あくまでも人間が誇りある人間であるためには某かの役割を担うべきだという持論によるものでひとすのにお勧めしているだけです。役割のない人間は総じてボケやすいものですから。繰り返しますがボケたあとの他者への「迷惑はかけないようにお願いしますね。下の世話は古いの影響が多々ありますので仕方ありません。とにかく座れる間は座り、立てる間は立つて、歩ける間は歩き、食べれる間は口から食べる生活を送つてくださいね」とかく座れます。

なにやら説教くさい文になつてしましました。そろそろ締めの言葉に入らせていただきましょ。

私は今日も元氣です。

貴方も元氣であることを一つでも願つております。
皆様にもよろしくお伝えくださいませ。

敬具

夢のよつな異世界にて
かな

佳永

追伸 やはり序文は元に戻そつと思います。私の中にある貴方への深い敬愛と広い家族愛を一言で言い表すのは『我が愛すべきクソジジイジの』が一番近いよつな氣がしますので。

さて、某カリスマミュージシャンは言いました。『イメージ！想像して『ご覧』と。

田の前に完璧な美形がいます。

身長はおよそ187?。筋肉は自分から見る限り、必要最低限はあるといつ程度。一度は鍛え上げたが、続くデスクワークと寄る年波でやや衰えてきたかという感じでしょうか。

赤い髪は燃える火の色をしています。愛きよつのよつことじゆべ

「」に混じる薄い赤はまるで踊る火の様子を表すが如くです。

満ちあふれんばかりの若さというには語弊が生じる程度には肌の美しさには影が見えていますが、代わりに生じたその眼瞼のまわりに生じた皺がなんともいえぬ渋みを演出しています。

表情筋というモノは年を経るほどにその人の人生経験を表すものだといいうのは、我が祖母の貴重な教えでありました。では、この笑顔も悩み顔も怒り顔さえも数多経験してきたような彼の御仁は一体どなただというのでしょうかと疑問に思つてゐる間に。

「これは、落人おとひとどの。今日はよろしく頼むのう」

などと当人から声をかけられてしましました。

「…………もし

や、チエイサさままでござりますか？」

なんとなく聴いた気がしますそのお声。

沈黙。

「ああ、」にむらの姿ははじめてでしたかの？　　そのとおり、ワシが今日の落人どのの仕事の相手じゃよ」

にやりと笑つたその笑みは、曾孫までいる竜族の大老どのにはまったく見えませんでした。
なんてこつたい。

「ほつほつ、落人どのはわれら竜族の獸姿しか知らぬとは、なんと
ももつたひない話じやのう」

仕事に入る前の微調整。

名目はそれで通るでしょうか？

場所は応接室。

「ごつてりと竜族の好きそうな装飾のされたインテリアの部屋に移つてのお話再開でした。

メイドのウルティカさんが持つてきて下さった紅茶を片手に優雅に話される美丈夫が、あの竜形の「チョイサさま」。

O

K・インプットは済んだ。大丈夫だこれで自分の経験値は上がった。おめでとう自分。

ピコーンと見えないパラメーターが実在したなら、レベルの一つくらいは上がつてもいいと思いたいくらいには衝撃的な経験値が稼がれた。まさに中ボス戦を終えたあとのことくだ。

「ええ、まことにもつたないですわ」

このように美しい姿を見逃していただなんて。につこりと言つ自分の表情筋がいまだうなつているのかがすぐ気になる。

にここにことこちらを眺めるチョイサさまの表情も気になる。

あれは、どういう意味なのだろうか。

ちなみに佳永自身は並みの並み。普通の顔だと言つ自覚はある。祖母にいわせれば磨きもしなければそうなりますとのことです。お祖母様、磨く前に奴があたしを修業に引きずり出しに行くという現実を御理解いただきたかったよ。

正直な話、人間顔じゃない人格だと思つ佳永にとつて美形は美形だ。観賞用。

もちろんその人格には敬意を払うが、鼻骨の一つも曲がつたら終わるだけの美貌なら別に有難くも在るまいといふ心境である。それにだ。

個人的には優美なうなじをもつ竜の姿やきらめく鱗の色、頭を上げて直角に方向転換する長虫たちの在り様のほうが見ていて面白いし、癒される。

美形など本の上に在るだけでいいよ別に。

むしろ、老骨でも体の軸をしつかりと伸ばした瞑想姿の武人の姿に心ひかれます。

これをいうと、友人は「終わってる…」と呆れたものだが。
結跏趺坐なんて短足胴長には難しいんだぞいいじゃないか憧れて
も…！」

「 やはりもつたいないので。カナ、さんと言つたか？」

名前を、呼ばれた。

「はい」

岩倉 佳永と申します。

もう名乗ることもないかと思っていた本名をつい述べてしまつた。
「リアディ殿には申し訳ないが…。我が邸に来る気はないだろうか
？」

もちろん、手厚く歓迎させていただくよ？

右手を差し伸べて、チヨイサさまは仰つた。

不思議なことに佳永の目先がその細く形の整つた指先に吸い寄せ
られていく。

「なに、落人としてでもよいし、なんなら我が家の孫どものいずれ
かの嫁になつてもらつてもいいのじやぞ？」

にこやかに発せられた声はどこか韻を踏むかのように耳に届いた。
何を言われているのかもよくわからない。

ただ、意識が揺らめく。

引き寄せられるようなその感覚は、まるで重力に落ちていくかの
ようだ。

何故？

「 ……」

「 いかがかな？」

老練な大老がその言葉を発した時、遅れてきたこの屋敷の主が現
れた。

「 チヨイサさま、申し訳ありません。至急の用にて遅れ……」

何、を。

遠くの世界で、リアディさまが何かを呴いているのが聴こえた気がした。

それはまるで水辺で溺れた人が離れた岸辺で叫ぶ人の声を聞いているかのようだった。

何をされていらっしゃるのですか、チエイサさま！
これはリアディ殿。お久しごりじやのう。なに、我が家にも落人がいらっしゃると老体の楽しみになるかと思いましてな。
だからといって、そのような力を使ってまですることではありません。それは のものです。

おやおや、いつのまにそんなにも熱くなられるようになつたのやう。 が訊いたら、むせび泣いて喜ぶことだらう。

聴こえる声は、音の連なりにしか聴こえなかつた。
ただ、わかつたことは。

一息、二息、三息、

「 滌はつ！」

丹田に氣を送り、四肢に血を巡らせる。
重心を取り戻し、体軸を整えた。

「 ……
ほつ」

目の前に立つ一人の美形 そう、ご主人様も間違いなく美形なのだ。いいよ、おまえら好きに煌びやかにしてろ が、

こちらを振り向いた。

「ご主人様は驚きの顔で、チエイサさまは少しだけ嬉しげに。

ああどこかで知ってる人種

いや、竜種？

だなあこの方。

「 チェイサさま。私は未熟ではありますがこちらでのお仕事に責任を持たせていただいております。これからも、チェイサさまにお客様としてご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願ひいたしたいと思つております。 お許ししていただけますでしょうか？」

「 さりげに乱れが残る息を整えながら、一礼した。

感情のままに怒ることは許されない。

何故なら、彼もまた上位種なのだから。 しかも、リアディ

さまよりも高い権力を握る。

「 なるほどこれは失礼した。落人どのは誠意ある方なのだな。このたびのお話は無かつたことにしておこうか」

もちろん、落人どのが希望であればいつでもご招待いたしますぞ。目の前に立つ竜族の主たる権力の持ち主はそう言って笑つて見せた。

目の前に立つリアディさまの顔色が悪かつたことは言つまでもない。

どこの世界も、老人は若者いじめるんだから本当に大人げないわ。

今日はどうにも自分の経験値があがりやすい日であるよつだ。

「 老体の意地悪、若者の経験値上げ。ちい理解した。

そしてどうなったかというと。

結論。

本日のお仕事は延期となりました。

主に私の体調管理の

ためですすいません。

竜の方々は幻獣と呼ばれる一族の一つ。

力ある彼等は、水に親しむ獣だ。

そしてご存じだろうか。

人間の身体の8割は水によって出来ている。

ぶっちゃけた話、チエイサさまは私の体内の液体を引き寄せてしまつたのですよ、あんのやる。

おかげで電解質のバランスが狂い、意識はもう少しひ、五感は遠のき、暗示にかかりやすい状態を呈しましたとやうにいってんだ。
もちろん、こちらとてそう好きにはさせません。

異世界の御老体がしでかしたお茶目は、地球世界の御老体が仕込んでくれた武術によつて塞がれました。

まさか、こんな氣力勝負を行うような口が実際にやつてこよつとは。

「じめんなれ」お祖父様。いま本氣であなたのじいきの有難みを知りました。

しかしだ。

だからと書いて、人外に通用するような技術を若い女子に教えるのもどうなんだそれも。

「うむ、今回はワシよりカナ嬢へのお見舞いとして代金分を払わせていただくとしようか。なんなら、大事をとつて3日後の休日もとれるようにこちらで配慮させてもらつてもよいぞ」

人形のチエイサさまが仰っています。

ええ、もう100%貴方のせいです全て。

言えるものなら書いてやりたい。　　目線で全てがばれているかもしぬないが、それでもいいから書いてやりたい衝動と佳永は戦つていた。

のに、目前でひょうひょうと書いてのけた相手がいたから、さあ困る。

「そうですね、…………では遠慮なくそうさせていただきまや」

真顔でチョイサさまに告げるリアディさまがいた。

つて、本気ですかご主人様！

田の前で気前よく言っているチョイサさまは曲がりなりにも竜族の要職につく方である。

彼の云うところは、3日後の予約を入れてあるお客様に対し「ちょっととちょっとあの子が体調悪いらしいから、あなたが楽しみにしてた予定なくしてあげてくれない?」と裏で権力と権力をちらちらさせつつ撤回させるということだ。ちなみに人はそれをパワハラと呼ぶ。

いくら自主的にチョイサさまがするんだとはいえども始めたばかりのお仕事である。ここで無理にそのようなことをしてお客様の不評を買うのは好ましくないと思つたのだが。

リアディさまの考えは違うようだ。

リアディさまは更に続けた。…………ああうん困る。（反応に）

「なにしろ、この仕事はカナがいなくては話になりませんので」
やはり、リアディさまは真顔だった。

「…………」しゅじんさま

あえての平仮名でご主人様を呼びたくなった。

面白げにリアディさまと自分を見つめているチョイサさまはびつ受け止めたんだこの言葉。

何も考えていないのだろうか。ゴシュジンサマの視線は人を引き抜こうとしたチョイサさまの顔を睨みつけるようでした。

……なんか火花飛んでないこれ？

「…………」

そして、お客様のお見送りと共にに行っている仕事仲間のトールと

レイヤと、メイドのウルティカさんの視線が痛い。

ちょっとなんか生ぬるい温かささえ感じるのはどうこうとかと

思つ。

お願いです神様。今すぐ自分を地球世界に連れてつてください。
さい。後生ですから。

くらくらする身体は電解質の異常のせいが、ご主人様の摩訶不思議な言動のせいが。
とりあえず休みを下さい。こまむじくベッドが恋しいんです。

了

(後書き)

…ご主人様がだんだんなにかに目覚めてきた模様です。よし来た
という方はどんと一言くださいませw。

筆者のわがままでシリーズにこだわらせていただいています。
御来訪していただいている方々には、まことに御迷惑をかけまし
て申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0171p/>

竜の世界にとりっぷ！ 3

2010年11月20日00時55分発行